

『しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と言われた。』(24節)

ガリラヤでの宣教の働きから一時的に立ち退いて休息に訪れたツロとシドンの地方。イエスは、救いを求めるカナン人の女を拒否しました。イエスさまの厳しい態度が理解し難い聖書箇所です。イエスさまは、意地悪を言っておられるのでしょうか。カナン人の女を試しておられるのでしょうか。そうではありません。イエスさまは、明確な境界線を引かれていたのです。人となられたイエスさまは、限られた時間と力の中で、当然優先順位を持っておられたのです。イエスさまが示されたのは明確な一線です。

「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」しかし、カナン人の女は、「主よ。ダビデの子よ。」つまり、イエスこそが神から遣わされた救い主であることを信じていました。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」と語られたイエスに対しても、「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」神さまのあわれみは、本来恵みを受けるのにふさわしくない異邦人である私たちにも及ぶのではないのですかと呼びかけるのです。彼女がそのように答えた時に、主イエスの中の何かに変化します。怒りは解け、大事なことを見出し、その変化が声にあふれ出ます。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」そして、娘は直ちに癒されるのです。そして、まさにここからイエスさまの宣教の働きは、異邦人に、サマリヤ人に広げられていきます。境界線は広げられ、十字架において、すべての人にまで、その恵みは及ぶことになるのです。同じように繰り返し、繰り返し、神さまは色々なかたちで私たちに呼びかけながら、古い境界線を押し広げさせ、外側にいる人を迎えさせよう、自分のことで手いっぱいだ、という考えを捨てさせようとしておられるのではないのでしょうか。人々の悲しみ、苦しみ、助けを求める声の中に、神の呼びかけがあるのです。今まで自分が引いてきた境界線、その外側から響く神の呼びかけを聞いたなら、信仰をもってそれに応えたいと願います。その時にこそ、救いは、神の恵みは、神の国は拡大していくのです。